
モチーフ

本倉 悠

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モチーフ

【Nコード】

N7856R

【作者名】

本倉 悠

【あらすじ】

いつか古楽器の生演奏を聴いてみたい。そんなさやかな願いをやや擦子曲がった方向に叶えられてしまった^{はやみちうし}迅見道子。今いる場所もわからず、元いた場所に帰る方法も知らず。それでも持ち前のポジティブシンキングで元の世界に戻ろうと決意する。そして半年後、とある町の広場の一角には横笛を携えた道子の姿があった。（意識：まだ現世に戻れていません）企画：SmileJapan参加作品。

そんなつもりじゃなかった

リッププレートに押し当てられた唇から息が糸のように紡がれた。喉口に流入した吐息が角に当てられ、陽光に煌めく銀製の円筒内で渦を巻く。反ってきた気流に抵抗を感じるや否や、丸みのある音が発され、雨上がりの雲一つない青空へ吸い込まれていった。

よくよく耳を敬てれば、僅かに音がかすれていることに気付くだろう。が、少女はその不完全さ、加工されていない生の音をこよなく愛していた。

緩やかに下降するかと思えば階段状に上り詰める音階。継ぎ目の殆ど感じられない洗練された演奏に、荷を背負った商人が足を止め、露店に並ぶ野菜と睨めっこしていた主婦が顔を起こし、広場の片隅に視線を送る。

高さが3mはありそうな赤煉瓦の壁を背景にして、少女は凜と立っていた。肩にかからぬくらいに切り揃えられた黒髪がそよ風に靡いている。左側頭部には四葉のクローバーを象ったヘアピンを付けていた。目を閉じているため瞳の色合いまではわからないが、整った眉に長い睫毛はそれだけで衆目を惹く。

白いブラウスにストライプ入りのチェックスカートという清楚な佇まい。背はさほど高くなく、幼さの残る容貌であるが、銀色に輝く横笛フルートが発する音色からは大人に負けぬ呼気のしなやかさが感じ取れた。

ややあつて、笛の音にチャリチャリと、硬質な音が混じるようになった。が、少女はそれを気にする素振りなど一切見せず、目を閉じたまま上半身を左右に揺らし、頭の中に浮かぶ旋律を一心不乱に

なぞっている。

高い音色が軽快なリズムを刻みながら未だ地面の乾き切っていない正方形の広場に響き渡る。そこから少し離れた通りでは鎖に繋がれていた茶色いむく犬が耳慣れぬ高音に応じ、負けじと息の長い遠吠えを上げ始めた。

耳をくすぐる旋律に心惹かれた者が小さかった人だけに一人、また一人と加わっていく。大人もいれば子供もいる。ついには聴衆達の何人かが小刻みに頷き、或いは握った拳を軽く振ってリズムを取り始める。

細い指先がなめらかに動き、爪先を捉えられぬくらいの速さでリングキーを叩く。クライマックス。高音域へと誘われた長音が段々とか細くなっていき、広場にいる者達の耳道に微かな余韻を残して消えてゆく。少女は顎を上げてリッププレートから下唇を放し、深呼吸と共に薄らと目を開けた。

目の前に人垣が出来ているのにきょとした瞬間、周りから拍手喝采が沸き起こった。少女は一瞬細い肩を震わせたが、惜しみない称賛の声が耳に入ったのだらう。きよきよと周りを見ると少し照れ臭そうにこめかみの辺りを搔いた。

ふと、上品な身なりをした背丈の低い老婆が何かを下手投げしたのを視界の下端に見止めた。つられて落下点に視線を下ろし、びしと身体を硬直させる。

知らぬ間に、開きっ放しになっていた赤いカバーのケースにはたくさんの銅貨と少しの銀貨が入っていた。少女が口を半開きにしている最中にも、硬貨の山に更なる硬貨が投げ入れられ、チンと澄んだ音を立てている。ようやく己のうかつさを悟ったのだらう、小麦色の小さな顔が顎から耳まで赤く染まった。

あわわわ。ど、どうしよう、これ。

実に四日振りの晴天。屋内よりはもつと広々とした所でやりたい。あわよくば新鮮な空気を吸いながら日当たりの良さそうな場所で笛の練習を、とただそれだけのつもりだった。

慌てて周囲を見回すも時既に遅し。そもそも目を瞑っていたのであるからして、誰がどれくらいの硬貨を投げ入れたかなんてわかるはずがない。今更『そんなつもりはありませんでした』と言ったところで小銭の山を一人一人に返すことなど不可能だった。

ややあつて、返却を断念した少女はチップを弾んでくれた聴衆達に恥じらいながらも深々とお辞儀をした。鳴り止まぬ拍手に混じって甲高い指笛が、そこかしこで鳴り響いた。

だって命に関わるんです

「そりゃちよいと迂闊でしたね、トーコさん」

薬売りのガンティさんは顎に蓄えた髭をさすっている。私よりも頭一つ分以上背が高いので心の中では親しみを込めてのつぽさんと呼んでいる。ぱつと見は四十代つてところなんだけど、実のところは二十代後半。髭だけでも人の印象つて凄く変わる。

「トーコじゃなくてト・ウ・コです。いい加減覚えてくださいよ」

「ええ、トーコですよ。あつてるじゃないですか」

のつぽさんが如何にも不思議そうな顔で私を見た。困ったことにつて別にそこまで困つてもないか。いつまで経つても『う』の発音を分かつてもらえないのだ。とはいっても、それはのつぽさんに限ったことじゃないのだけど。

「何せ、ここジェノヴァの青空広場は近隣諸国から芸人たちが集まる場所ですから。路上で生活費を稼ぐ者も多いですし、勘違いされるのも無理からぬこと」

うん、自分の考えの至らなさはめっさわかつているんだよ。

「後は、あなたの笛の音が悪い」

ガンティさんが意地悪そうな目で私を見た。言葉を聞くと誤解するかも知れないけれど、決して演奏の技術が稚拙だと言っているわけじゃない。むしろその逆だ。

「私も随分長いこと世界各地を渡り歩いています、あれほど優雅な音を出す楽器なんて目にしたこともありませんからね」

のつぽさんの言うとおり、私が持つている横笛フルートはこの時代にはあるはずがない物。そもそも純銀製の横笛フルートは1800年代によつてやうできたのだ。1500年代後半には存在しない。ちなみに今は1560年。この星の反対側では織田信長が今川義元相手に桶狭間でひ

やつほいしている頃だ。そうと思うと歴史好きの私としては感慨深いものがある。義元さん、多分死んじゃうけど頑張つてね！

と、まあそれは置いて、楽器にしろ、技法にしろ、私の扱う物は今の時代に住む人たちにとっては未知の代物。耳新しく聞こえるのは当然だ。知っている曲のメロディ、レパートリーにしても、そのほとんどはこの時代以降の楽曲なのであるからして。

私だってオリジナル曲の一つや二つ作っているけど、名曲と言えるかは別問題。クラシックの一人者に比べればそりゃ一月とすつぽんってなもんです。私の曲なんかを披露するくらいならバッハなりラエモンの主題歌なりを吹いた方が通行人もわんさか集まってくるだろう。それはわかっている。

ただ、他人の下着、じゃなかった、ふんどしで相撲を取るのは流石に気が引けちゃう。そんなわけで吹くのはオリジナルの曲のみと決めている。だって、万が一私がそれを吹いたことで後世の人たちが作った曲がパクリ呼ばわりされたとしたらそんな酷い話もないじゃない？ ぶっちゃけ、この世界で名誉だのなんだのを得たところで、元の世界に帰る私には無用の長物なわけだし。まあ、その手掛かりを探して半年経っちゃったけどさ。

うつ、ここに飛ばされた時の辛さを思うと涙が滲んじやう。だつて女の子

「そろそろご飯にしましょうか、トーコさん」

「Io voglio mangiare pasta（パスタ、食べたいです）」

初めて覚えたイタリア語がこれ。言えなきや命に関わるし、こればかりはしょうがないんだよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7856r/>

モチーフ

2011年4月7日12時10分発行